

特集 地域で羽ばたく中小企業診断士6

第2章

実家再生が導いた二地域居住で 茨城の地域活性化を目指す

薄 友香里 氏



大野 秀敏

東京都中小企業診断士協会

2024年に独立開業し、茨城県で「ピクシーポートコンサルティング」を経営する薄（うすき）友香里氏。

大学院修士課程を兼ねた中小企業診断士の登録養成課程では、茨城県初の古民家ゲストハウス開業に携わった学生時代の経験を題材に、都市部と過疎地域の二地域居住政策を研究した。現在は茨城県を拠点としながら、都市部へも頻繁に足を運ぶ。その背景や地域支援への思いを伺った。



薄友香里氏（画像提供：薄氏）

経済を支える製造業の発展を牽引している。

一方で、全国第3位（2025年現在）の耕地面積を有する広大な平坦地、豊かな海産物や山の恵みにも支えられ、農林水産業もまた、県の主要産業として根づいてきた。

さらに近年では、筑波山や霞ヶ浦などの自然資源を生かしたアウトドアやグリーンツーリズム（農村地域で自然や文化・人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動）などの観光産業も注目されており、日本の原風景や伝統的な生活体験を求めるインバウンド観光客からの関心も高まっている。

2. 地域の垣根を越えた挑戦

(1) 地元・茨城での開業—地域支援の拠点

2024年、中小企業診断士の登録養成課程を修了した薄氏は、生まれ育った茨城県で「ピクシーポートコンサルティング」を開業した。

以降、県内の公的支援業務に積極的にかかわり、茨城県事業承継・引継ぎ支援センターでは、すでに複数のクライアント支援を手がけている。また、自らも事業者として地元・つくば市商工会に名を連ね、経営者や地域関連団体との交流にも力を注ぐ。

「茨城県は、『都道府県魅力度ランキング』での最下位争いが話題になりますが、それ自体がビジネスチャンスだと考えています」

そう語る薄さんの瞳には、自らの経験を通じて積み重ねた地域支援への特別な想いが宿る。

1. 自然・産業・観光が融合する茨城県

関東平野の北東部に位置する茨城県は、県西・県央・県北・県南・鹿行（ろっこう）の5地域に分かれる。中でもつくば地域を中心とした県南部は、国や大企業の研究機関が集積する「筑波研究学園都市」が広がり、県の

(2) 東京協会と「アグリビジネス研究会」

つくば駅（茨城県つくば市）と北千住駅（東京都足立区）を約35分で結ぶ「つくばエクスプレス」。茨城県中小企業診断士協会のほか、東京都中小企業診断士協会（以下、東京協会）にも所属する薄氏にとって重要なライフラインである。東京協会では「アグリビジネス研究会」に所属し、6次産業化・農商工連携などの農業関連のテーマについて、都市部の経営支援者と実践的なノウハウを共有している。

地域の垣根を超えた二拠点活動の背景には、薄氏の幼少期からの原体験や、中小企業診断士を目指すきっかけとなった学生時代のある体験が深く関係している。

3. 地域支援の原点となった「実家再生」

(1) 筑波山麓の原風景にも過疎化の波が

薄氏が生まれ育ったのは、いずれも茨城県の豊かな自然を象徴する筑波山と霞ヶ浦に挟まれた、八郷町（やさとまち）と呼ばれる農村地域（現在の石岡市）。ご両親は今もこの地で専業農家を営んでいる。

筑波山麓に茅葺き民家が点在する里山風景は、「にほんの里100選」にも選ばれる美しい地域だ。三方を山々に囲まれた盆地地形がもたらす独特な気候は果樹栽培にも適し、パラグライダーやフラワーパークなど家族で楽しめるレジャースポットも充実している。

幼い頃から里山の自然や農作業に親しんだ薄氏は、地域社会との結びつきを肌で感じながら、地元への愛着を育んできた。しかし近年では、少子高齢化や過疎化といった課題が深刻化している。

(2) 空き家となった「実家」の行方

つくばエクスプレス開業の2年後に当たる2007年、当時中学生だった薄氏とご家族は、過疎化地域で老朽化していた旧家屋（以下、実家）を離れ、隣地に新居を構える。築50年を超えていた「心の拠り所」は空き家となり、その後も十分な手入れをすることのないまま、

東日本大震災でさらに傷みが進んだという。

「壊すか、残すか。家族でも意見が分かれていましたが、『受け継いできた実家を残したい』という父の思いを尊重し、ゲストハウスとして再生することで一致しました」

こうして地元工務店と協力して実家をリノベーション。2015年秋に古民家ゲストハウス「jicca」（ジッカ）を開業する。

伝統的な風情を残す日本家屋と、心休まる里山風景が融合した宿屋は、やがて国内外からの観光客や移住希望者にとってのサードプレイス（自宅や職場から離れた、心地よい第三の場所）となった。



「jicca」開業イベント（画像提供：薄氏）

(3) 創業経験が教えてくれたこと

大学生の薄氏は、当時注目され始めていたクラウドファンディングにも挑戦して改装資金を調達。開業後の施設運営にも深くかかわった。「旅館業法や資金計画の知識が乏しく苦労の連続でしたが、この創業経験が中小企業診断士として独立する原点になりました」と当時を振り返る。

大学卒業後は、東京の大手出版取次会社に就職。2年間の社会人経験を積んだ後、結婚に伴い宇都宮へ転居。その後、出産を機に地元・茨城へUターンした。

「東京での就職以降も『jicca』を手伝っており、茨城の自然資源や文化資産の活用に大きな可能性を感じ始めていました」

茨城を生活拠点とし、子育て中も働く場所に縛られない柔軟な働き方を模索する中で、やがて中小企業診断士という選択肢に出会う。地域に根差しながら、自らの力で羽ばたいていこうという思いが薄氏に芽生える転換期でもあった。

4. 登録養成課程で地域支援策を磨く

茨城県に活動拠点を置くことを決めた薄氏は、1次試験合格後、実践的な経営支援スキルを短期間で習得したいという思いから、迷わず中小企業診断士登録養成課程への進学を選んだ。育児との両立を図りつつ、都内の校舎と茨城の自宅とを往復する日々が始まった。

登録養成課程と並行して履修した大学院修士課程では、「jicca」開業とその運営に携わった経験を振り返り、「過疎地域の空き家活用による地域経済の新たな価値創造」を研究テーマに選ぶ。都市と地方を行き来しながら働く生活スタイルにも強い関心を寄せる契機となり、中小企業診断士として地域課題に向き合うためのヒントを見つけ出していった。

5. 農業支援から観光産業へ架ける橋

(1) 農家繁忙期と体験イベントのギャップ

「茨城では農業が依然として重要な産業ですが、後継者不足は深刻です。まず、農業従事者への支援を通じて、地域全体の課題解決に貢献していきたい」

専業農家に生まれ育ち、地元・茨城と東京を行き来する生活の中で中小企業診断士となった薄氏の言葉からは、「二地域居住」を取り入れた新たな地域支援の姿が見えてくる。現在、特に注力しているのが、農業と観光産業を結びつける取組みだ。

農作業体験と聞いて都市部の人々が思い浮かべるのは、春から初夏にかけての田植えや秋の稲刈りだろう。しかし、専業農家で育った薄氏によれば、「田植えや収穫の時期は農家にとって一年で最も忙しい時期。そもそも

農作業以外に手を割くのは難しい季節」。

そこで薄さんが着目したのが、「バケツ稲」である。バケツ稲とは、その名のとおり小さなバケツに床土を詰めて数本の苗を植え、稲を育てるものだ。学校の授業や家庭での体験実習など、食育や農業学習の一環として広く活用されており、都市部にいながら本格的な農業体験を楽しむことができる。農作業を熟知した薄氏は今、このバケツ稲を使ったあるアイデアを温めている。



バケツ稲はベランダでも楽しめる
(画像提供：一般社団法人全国農業協同組合中央会)

(2) 苗の「廃棄再生」プロジェクト構想

稲作の方法には水田に直接種をまく「直播（ちよくはん）栽培」と、稚苗（ちびょう：本葉が3枚ほど出た状態の苗）を育ててから植え付ける「移植栽培」の2つがある。

日本で主流の「移植栽培」では、育苗箱と呼ばれる箱型容器で稚苗を育てるが、天候不良や病害虫のリスクに備え、多くの農家では育苗箱を少し余分に準備するのが一般的だという。薄氏は、この余剰苗に目をつけた。育苗の過程で使われずに廃棄されていた苗を、都市部の学校や家庭に「バケツ稲」として提供するのだ。

「繁忙期の農家の負担を増やすことなく、

食育や農業体験の機会を提供できます。いわば『お米のいのちをつなぐ廃棄再生プロジェクト』。小規模の無料配布から実験的に始め、将来的にはビジネスとしての展開も視野に入れています」

(3) 茨城への人流を作る

だが、薄氏が「バケツ稲」に取り組む本当の狙いは、農業と観光産業の橋渡しを図ることにある。宅配便を使えば、苗株は都市部へも手軽に配送できる。しかし、希望者にはあえて現地農家まで足を運んでもらう予定だ。その道中で立ち寄った県内の観光地や宿泊施設などに関するヒアリングを行い、観光関連産業との連携につなげたいと考えているのだ。

「農業を観光資源の一部ととらえ、その魅力を伝えることで、茨城県内への移住や、都市部との二地域居住を考えてもらう契機になれば」と薄氏は目を輝かせながら語った。



東京協会での研究会活動（画像提供：薄氏）

6. 地域と都市を結ぶ羅針盤に

(1) 二地域居住が拡げる可能性

国土交通省によると、二地域居住とは「地方への人の流れを生み、地域の担い手の確保や消費需要の創出、新たなビジネスや雇用の創出に寄与するもの」とされている。これはまさに、薄氏が目指す方向性そのものだ。

「都市部の消費者やビジネスパーソンが茨城の地域産業にかかわる機会を増やすことで、新しい価値を生み出したい。私自身も東京と茨城を行き来しながら、地域の人たちが安心

してビジネスに挑戦できる環境をつくっていったらと思います」

(2) 「心の拠り所」を目指して

薄氏が屋号として選んだ「ピクシーポート」。ラテン語で「羅針盤」を意味するPYXISと、英語で「港」を意味するPORTを組み合わせた造語だ。そこには、「経営者が進むべき航路に迷ったとき、立ち寄って休み、これまでの歩みを振り返り、新たな力を蓄えて未来へと再出発できる『港』でありたい」という思いが込められている。

2025年度、薄氏は茨城県よろず支援拠点（実施機関：公益財団法人いばらき中小企業グローバル推進機構）のコーディネーターに4月から就任している。また、農業経営アドバイザーの資格取得にも挑戦中だという。

都市と地方を結ぶ「二地域居住」の実践、農商工連携による地域活性化、地域企業の事業承継支援。そのすべてに共通するのは、「日々挑戦する人々の『心の拠り所』をつくりたい」という薄氏の揺るぎない信念である。

その薄氏自身も、地域で羽ばたくという希望に満ちた航海へと船を漕ぎ出したばかり。地域事業者の羅針盤・心の拠り所を目指す船出に向けて大きく帆を膨らませている。

薄 友香里

（うすき ゆかり）

大学在学中にクラウドファンディングで資金調達し、茨城県初の古民家ゲストハウスを開業。大手出版取次会社とモデルの経験を経て、2024年中小企業診断士登録し、独立。これまでの経験を生かし、創業・WEBマーケティング・農業分野の支援を行う。茨城県よろず支援拠点コーディネーター。



大野 秀敏

（おおの ひでとし）

横浜国立大学特任准教授。製品開発・プロジェクトマネジメントが専門。大学スタートアップ支援に従事。2023年中小企業診断士登録、米国PMI認定PMP®。

